

第7回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

雲間の一瞬

高橋 利延（神奈川県相模原市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

一面の霧氷が前景にあっても決して好条件とはいえない中での、これは作者の粘り勝ちだろう。なかなか顔を見せないガスの中、その富士山が見える一瞬まで耐えるには、なまなかの精神力では及ばない。流れるガスの中に浮かぶ富士山に、もつともつと欲が出るが、シャッターへの決断、それが最良のシャッターチャンスとなる。悪条件を逆に好条件に転化させたその一瞬を買う。申し分ない調子、何よりも構図がいい。格調の高さとムードの融合が、この秀作を生んだ。

推薦

春の息吹 小林 博（山梨県大月市） 雁ヶ腹摺山



白簞史朗氏講評

第2回からずっと出ずっ張りのベテラン作家。新緑の感じからいうと題名がちょっとそぐわないが、いかにもさわやかな画調が春の芽吹きを思わせる。作者はいつも、何でもないところから自分の世界を見つけ、引き出してくる。いつもそうしたことを考え、表現しようとしても、それはなかなか困難であるが、作者は難なくそれを自分のものとしてしまう。欲をいえば、左方の木の幹と下方のヤブを画面から外したい。作者の意図がさらに明確に表現されたい。

推薦

紅富士（川霧漂う）

遠藤 潤（山梨県東八代郡）

百蔵山



白簀史朗氏講評

すでにこのコンテストでは常連となって、つねに高度の作品を見せてくれる。今度の作品は中でもひとときわぬきん出たものといえ、いままであまり好作品のなかった百蔵山からの富士山に一石を投じた。過去5回のうち、第1回が服部康司氏、第2回が天野治江氏、3回以降連続で北沢清行氏が百蔵山で入選され、すべて大月市の作者だった。そのジnkスを破るすばらしい朝の富士、紅に焼ける雪肌の調子が、下方の雲とすばらしい対照をみせている。

特選

ダケカンバ冴える

高津 秀俊（山梨県大月市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

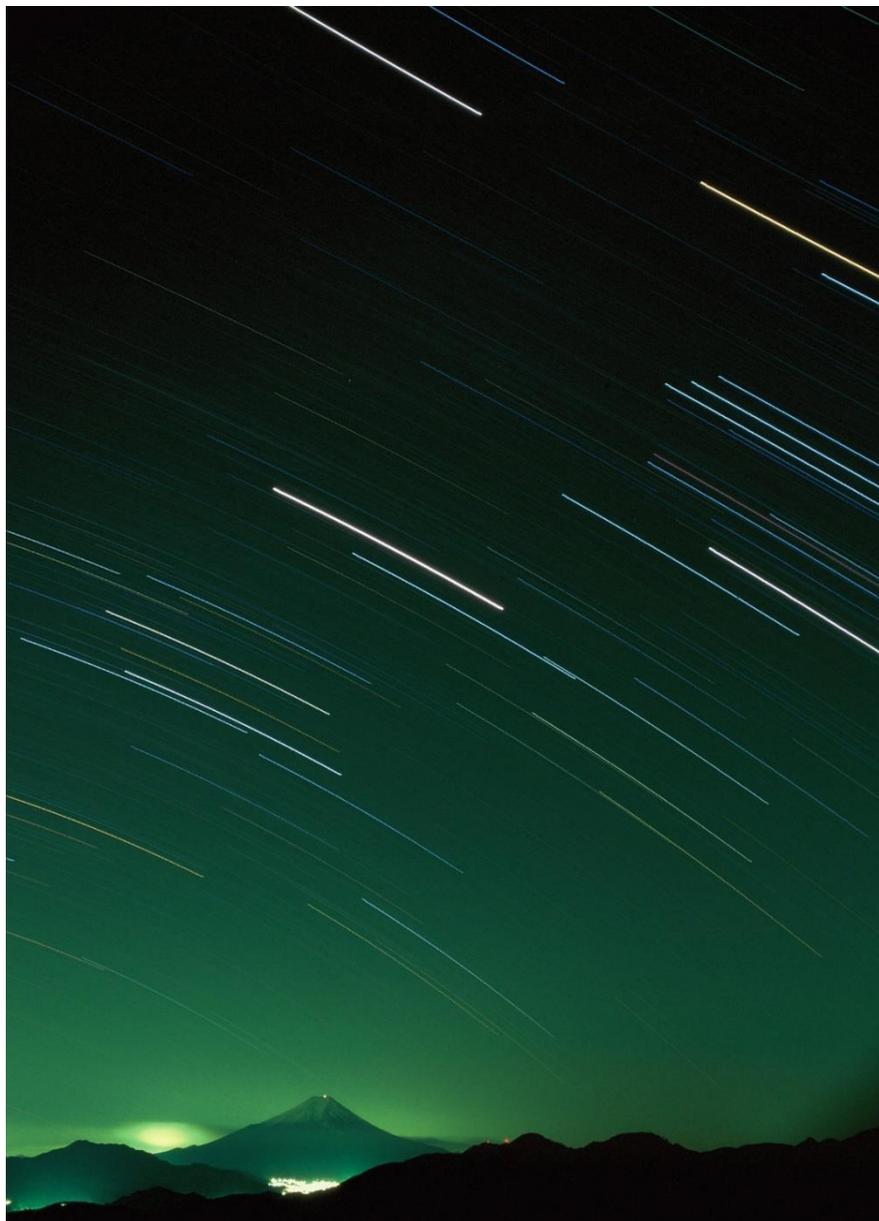
応募点数65点、大蔵高丸、ハマイバ、白谷ノ丸から撮影した作品の総数である。その中から最優秀賞に次いで選ばれた秀作である。作者本人のいうところのダケカンバの幹の横光線による浮き出しが、まことによき前景となって富士に対してしている。左方手前と右方のダケカンバのそれぞれの大きさと配置がよく、富士山との3点配分で、2年連続の特選として申し分ない安定した三角構図を作っている。右方と下部をほんの少し切るとさらによくなる。

特選

星夜

奈木 正次（静岡県沼津市）

奈良倉山



白簾史朗氏講評

過去3回の最優秀賞作家も、今回はまことに残念ながら4回目の栄冠は成らなかった。とって作品の出来栄は決して悪くなかったのだが、昨年の最優秀賞作品と撮影する山はちがっても偶然、瓜ふたつの構図・調子となってしまったからで、作品の質は今回の方が上とあっても、落とさざるを得ない。だが、さすがにベテラン、この星夜の作品はケチのつけようがない。みごとに決まった構図と調子、これが夜景でなければ、と思うのはあながち選者だけではないだろう。

特選

雪景色 井上 和夫（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

作者は過去6回、すべて入賞、ことに第2回には推薦をものにされ、地元作家として万丈の気を吐いている。扇山は本当の地元の山で第2回と昨年について2度目の入賞だが、奇しくも第2回の推薦と同じアングルでの特選である。もちろん条件は異なり、今回は冠雪の樹林を前景としたものとなっている。手前の樹林に当たった光と中景の霧、遠景の富士山との安定した構図と豊かな調子が、作者の表現意図を明確に表している。

入賞

雲上靈峰 境 実 (神奈川県相模原市) 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

応募点数46点、大蔵高丸に次いで多数応募作中、推薦を小林博氏にゆずったとはいえ、捨て難い魅力を秘めている作品である。雲海をはじめとする画面の調子に得もいわれぬものがあり、作者の精進をうかがわせるが、ただひとつ、ほんのちょっとしたアクセントが欲しい。富士山に新雪のきらめきでもあればと思うが、これは無理な注文というべきだろう。だが、雪のない季節、これだけの作品をものにした努力は並たいていの技術ではない。

入賞

巻雲流れる

大塚 康夫（神奈川県津久井郡）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

上空いっぱいひろがる秋雲、絶好のモチーフではある。牛奥ノ雁ヶ腹摺山まではアプローチが大変だが、それをおぎなつて余りある恩恵がそこにはある。作者は、昨年初入賞し、連続入選した。手慣れた手法でこの秋空にひろがる雲を富士山を入れてまとめ上げている。やや画調が暗いので爽やかさが減じたが、秋の澄んだ大気中にひとり立つ富士山が感じられる作品。少し右方と下を切ることで、もっとバランスがとれてくる。

入賞

ツツジに富士 高村 茂（山梨県富士吉田市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

第3回特選と入賞、第4回入賞のベテラン作家であるが、惜しくも第5回、第6回は選にもれた。だが、捲土重来、今回はみごと入賞した。トウゴクミツバツツジの花むらを手前に置いての富士との組み合わせは、平凡とはいってもやはり捨て難いモチーフである。逆いの字構図での捉え方は堂に入っている。右隅の黒の処理にいま一步というところと、もっと中景のピントに注意したい。データの日付ほかを完璧に記入のこと。

入賞

朝光

奈木 正次（静岡県沼津市）

滝子山



白簾史朗氏講評

超と付けてもよいベテラン作家ではあるが、そうなるには平素の努力精進が不可欠といえる。今回も氏はダブル入賞ではあるが、これは氏が、他の作家が敬遠する、苦勞の多い撮影地に営々と足を運ぶことからきている。この滝子山からの作品は毎回少なく、昨年はずただの2点、今年も2点でそれが奈木氏である。だが、そうした点、他に応募作品がないための入賞ではない。みごとな切り取り、絶好のチャンスによる作品だ。

入賞

疎林の彼方に 小谷 哲朗（三重県松阪市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

作者は初挑戦での初入賞である。やや意外性ある作品で、あの好展望の奈良倉山で、わざと手前にじゃま物を入れて撮影している。いや、この場合、じゃま物とはいえない。カラマツのすいすいのびた幹が、逆に単調な好天時の富士山を生かす結果となった。いつどこにでもチャンスはある。それを地で行ったといえ、これも常からの努力が生きたといつてよい。左右、下方と少しずつ切った方が、さらに富士山が生きてくる。

入賞

紅葉

天野 昭吾（山梨県大月市）

扇山



白簾史朗氏講評

この作家の作品を見るたび、いつも“ああ、惜しい”と思ってしまう。毎回すばらしい条件で捉えた作品ばかりで、その点は作者のカメラアイを再認識するのだが、いつも露光値が富士山に対してオーバーになってしまっていて、雪の調子がベタになってしまっている。それが入賞を逸する因で、それさえなければずっと通しての入賞は間違いないところだ。今回の作品も若干雪が飛んでいるが、これは選のラチチュードに入り、色彩配分が実に美しい。だが、手前のピントにもう少し注意。応募票の記入を正確に、計測法、露光計のチェックを、辛評多謝。

入賞

早春の朝 北沢 清行（山梨県大月市） 百蔵山



白簾史朗氏講評

やはり第3回からずっと入賞の作家であり、ことに第6回は特選を射止めている。今回は百蔵山からの雪景色で、うまく光線を使った作品が入賞した。中景の尾根の光が利いていて画面に動きをあたえている。全体にやわらかい調子なのは降雪直後なのに（データの日付記入のこと）もやが多かったのかも知れない。だが、それがうまく題名とつながっている。カメラポジションをもっと右に移せば、駒橋発電所の鉄管がかくれ、画面はもっと整ったはずである。少しピントが甘いので注意。

入賞
新雪

石川 厚志（山梨県大月市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

今回が初入賞の作家であるが、それにしては堂に入った捉え方をしている。と云ったら失礼だろうか。いの字、二重三角構図、巧まらずして理屈に叶っているといつてよい。全体の露光値も正確で安心して見ていられる。ただ、すこし気になるのは空部の空きで、すくなくとも、あと半分はつめなければ、前景と富士山の関係がきゅうくつとなる。経験は浅くとも、体を使うことを苦にせず、写真に情熱を、自然に愛情を持たれば好作品が撮れるという実例でもある。

入賞

爽秋

加藤 泰郎（山梨県大月市）

高畑山



白簾史朗氏講評

氏も第4回をのぞいて、あと全回入賞のベテランだが、今回もまた苦勞の多い山からの富士山である。高畑山・倉岳山はいつも応募が少ないが、今回も7点であった。作品的にはまずまずといったものもあったが、以前、選者の撮影した構図・条件そのままであったので、その作者には遠慮してもらった。この作者の作品も構図的には横の方が良かったと思うがどうだろう。ずっと爽やかさも出てくると思うし、作者のオリジナリティも出る。題名は「晩秋」とした方がぴったりである。

入賞

初雪のころ 松里 房子（東京都板橋区） 九鬼山



白簾史朗氏講評

この撮影地もアプローチは少ないのに、いつも応募作が不足で、今回も4人が一点ずつの応募だけだった。女性にしては、といたら失礼になるが、まことに力強い作品で、薄雲下の弱い調子の富士山を手前の尾根の黒でしっかり引き締めている。だが、縦位置だとやはり、下部が多く、重すぎるので、これも横位置とした方がぐっとよくなる。引伸しの際のマゼンタかぶりが強いので爽やかさが表現されていない。ラボに注意が必要。

入賞

朝光

八巻 長子（山梨県中巨摩郡）

高川山



白簾史朗氏講評

高川山もアプローチ短かく、登山者は他の山にくらべて多いのに、どうしても、ここも応募が少ない。今回は4番・10番の山頂とおなじく4点に止どまった。だが、出色の作品があり、救われた思いであった。山頂の松の木を前景に入れこむのは、通常誰でもすることであるが、それを朝陽の光で強調することまでは考えない。朝の赤い光に松の幹がより赤くなり、逆に葉が暗くなってうるささが消えた。アイディアといえればそれまでだが、そのアイディアがオリジナリティである。

入賞

秋模様

佐野 和彦（静岡県庵原郡）

清八山



白簾史朗氏講評

記憶ちがいでなければ、この作者も初入賞である。画面にあざやかな色彩は皆目ないが、いかにも爽やかな感じを受けるのは、やはり高々と空にぬける新雪の富士山のせいである。横からの光線が中景の山肌を黒く沈ませたため、より富士山が高く見え、手前のさほどでもない紅葉が光をもった。画面の切り方もほぼ申し分なく、秋の気配を濃厚に表わしている。しっかりした技術を身につけたこうした新人の進出を大いに期待する。

総評

審査員長 白簾史朗

第7回を迎えた大月市「秀麗富嶽十二景写真コンテスト」は、本年1月31日、無事審査を終えた。今回の応募者数50名、応募点数は219点とまずまずの数であった。この数字を第1回から第6回までの数字と比較してみると、非常に興味ある問題を含んでいる。

過去7回（今回を含めて）のうち、もっとも応募人員の少なかったのは第2回で、応募人員数30名未満、応募点数もまた80数点であった。過去7回中、これが最低の成績であったが、その翌年、第3回になると、この数が一挙に倍増、応募者数59名、応募作品数168点となって関係者をよろこばせた。作品の質も著しく上昇し、いままで12の山頂のうち、必ず1～2、また2～3が抜けていたのが、この第3回以降すべてカバーできるようになった。多くの山頂、さまざまな角度からの作品が集まるようになったのは、この第3回の締切り日前、10月末に雁ガ腹摺山において市主催の写真教室・撮影会がおこなわれたことが大きく寄与したものと思われる。

その後、第4回51名の175点、第5回49名の195点、第6回は53名で220点となる。そこで第7回の今年ということになるが、応募者数50名、応募点数219点である。歴年比でいうと応募者数はほぼ横這いであるが、第3回から7回までの順位は4番目となる。

ただ、応募者数の減少にともない、通常は応募点数も減少するものであるが、逆に4・5・6回と回を重ねると増加し、3年のうちに何と52点の増となった。そして今年、第7回は、今年の第6回よりただ1点のマイナスであった。

応募者の内訳をみると、市内15名で1名減、県内14名で6名減、しかし、県外は4名増である。応募点数も市内は10点増、県内は18点減、県外は+7点となり、市内応募者のがんばりと、県外応募者の増加が目立っている。

作品については例年どおりで、1番山頂と3番山頂がずばぬけて多く、ことに3番山頂を前年比で見ると応募点数は24点減といっても、まだ65点の応募があった。1番山頂も46点で6点の増である。アプローチの点からいうと、この2山頂はさほどの差はない。

だが1番山頂に付随する姥子山へアプローチを考えると、3番山頂に付随するハマイバへの往復の方が楽なこと、さらに最近では逆方向の白谷ノ丸もこの3番に含まれるようになったことも影響しているのではないかと、と思われる。

いずれにしても、今回また、4番・10番・11番の山頂からの応募は各4点しかなく、次いで少ないのが9番7点である。この数差をいかにして縮めるかが、

今後の課題となろう。

幸いにして懸案であった入賞点数の増加に嬉しいニュースが聞こえそうな状況である。そうなれば、同じ山頂からの作品より、異なる山頂からの作品が有利となるのは自ずと明らかである。

今回もまた、作品の質の向上は大いに見られ、関係者をよろこばせた。昨年引きつづき新人の台頭がいちじるしく、ことに最優秀賞は新人のうえにかがやいた。しかし、ベテランの奮起もまた顕著で、すばらしい作品が選出されたことは、このコンテストをますますの隆盛にみちびくものとして、まことによろこばしいことである。

だが一方、折角作品を寄せて下さったのに、ちょっとした露出の測定間違いで画面全体の調子を崩したもの、富士山の雪肌を白紙の切り抜きのようにしてしまったもの、富士山頂を画面の縦割り中央や、横割り中央、果てはまんまん中に位置させた「お子様お絵描き」の作品が依然として多い。自分のそうした無意識的なくせ、または間違った構成、そうしたものをなくすため、もっと自由な発想で撮影をおこないたい。永年こうしてやってきたのだ、という頑なな考えを捨てないかぎり、新しい表現は訪れないことを、新人もベテラン（こそ）もはっきりと知って欲しい。

今回、残念ながら入賞しなかった方も、来年こそ、と想いを新たに、この美しい富嶽十二景に挑戦し、栄冠を射止めていただきたいと、切に願っている。